

晩秋から早春までの草地管理

1. 牧草にとっての秋とは？

牧草は、春から生育を始め秋まで続きますが、その茎葉収量のほとんどは春の一番草で占められ、秋に向けて収量は少なくなることから、「春に始まり、秋で終わる」と考えられています。しかし、その一番草の収量の基を作っているのは、秋に発生する「新しい分けつ」(図-1参照)なのです。したがって、牧草の生育は秋で切れているように見られますが一年中連続しており、かつ、一番草の収量は前年の秋の管理によって決まる、と言っても過言ではなく、秋の管理は非常に大事な作業になります。以下に、その管理ポイントを記載しましたので、参考にして下さい。

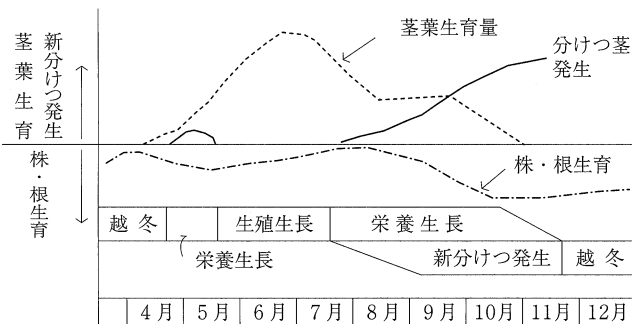


図1 牧草の器官別生育の季節的推移(模式図)

2. 秋の管理のポイント

①刈り取り危険帯：秋は牧草の茎葉収量は減少するものの、新しい分けつが発生し、根の生育も旺盛になります。ところが、この生育が旺盛な時期に刈り取りをすると十分な生育ができなくなり、翌春の生育に影響を与えることとなりますので、この時期は刈り取りを行なわないようにします。この時期を「刈り取り危険帯」と言い、オーチャードグラス主体草地の場合、東北地方での刈り取り危険帯は、青森(野辺地)が10月上～中旬、岩手(盛岡)で10月下旬頃となっています。この危険帯は地域によって異なりますが、その目安は平均気温が5℃になる30～40日前の時期として下さい。

②秋施肥：草地に追肥を行う時期として早春と一番草後が主体であり、2番、3番草後は追肥しない、というケースが多いようです。また、早春に追肥する場合、天候不順や地理的に条件が悪い圃場ではそのタイミングを逃してしまう場合も多々あります。したがって、早春の追肥作業を秋へ分散し、牧草の秋の生育に合わせた追肥体系とし春の生育を良くするために、最終刈り取り直後の追肥(秋施肥)を行うことをお勧めします。ただし、刈り取り危険帯中にやむを得ず草地を利用した場合には、その直後の追肥は避けます。すぐに追肥をすると牧草の再生が促進されて貯蔵養分の消耗が大きくなり、越冬性にも影響すると考えられるためです。秋施肥の施肥量としては多肥は避け、窒素成分で3～4 kg/10aを目安にします。(リン酸、カリは同

程度の施肥量)

③炭カル施用：特殊な土壌は除き、日本のほとんどの草地は酸性土壌が多いのが実態です。極端に酸性化がすすむと、窒素やリン酸、カリ等の養分も吸収されにくくなることから、炭カル等によるpH矯正が必要になり、秋の最終刈り取りが終わった後に実施することが有効です。投入量は土質や実際のpHによって変わることから、土壌分析結果に基づいて決めることをお勧めします。

④除草：経年草地では夏以降に牧草の生育が緩慢になるにしたがって、ギシギシが特に目立ってきます。気温が下がり牧草への薬害の心配が少ない秋に除草剤によって駆除するようにします。以下にギシギシに効果のある除草剤を示しましたが、薬量や定められた使用方法を厳守するようにして下さい。

薬剤名	使用量(／10a)	希釈水量(／10a)
バンベルD液剤	75～100ml	100ℓ
ハーモニー75DF水和剤	3～5g	100ℓ
アージラン液剤	400～600ml	80～100ℓ
	50～80倍液	25ml/株又は100ml/m ²

⑤土壌分析の実施：草地を新たに造成する際には土壌分析を行い、炭カルや基肥の量を定める方は多くいますが、経年草地で土壌分析をする方は少ないようです。しかし、通常の畑と違って毎年耕起されない草地だからこそ土壌診断を行う必要があり、その結果によって炭カルを投入するタイミングや量を定めることが正しく、経済的でもあります。

⑥簡易更新の実施：経年草地で雑草は少ないものの、牧草の密度が低下している場合には、9月上～下旬を目安に、ペレニアルライグラス「フレンド」やフェストロリウム「パーフェスト」(新品種)の追播をお勧めします。

3. 早春の管理

秋に十分な管理(刈り取り危険帯時期の刈り取り回避、秋施肥の実施等)ができていれば、春の追肥が多少遅れても一番草の収量に大きな影響はありませんが、もし、秋の施肥管理が十分でなかった場合には、牧草の萌芽時期に合わせて、早春に追肥を行うようにして下さい。

(千葉研究農場 立花)

雪印種苗株式会社

編集発行人 城座 勝明

本社004-8531札幌市厚別区上野幌1条5丁目1番8号

TEL(011)891-5911

東北事業部

024-0004北上市村崎野14地割174-1

TEL(0197)66-2226

FAX(0197)71-3307